

明星学苑刊行『體驗教育』第1号～第138号史料収集報告 — 第25号「校旗制定」に関する記事を中心に —

長谷川 倫 子*

1. はじめに

2015年2月には、自校史資料として、明星学苑刊行の『體驗教育』（現、『体験教育』）第1号（1929（昭和4）年1月15日）～第138号（1940（昭和15）年6月15日）を古書店から入手した。今回入手した資料群は、31号、50号、53号、134号、137号を欠いており、資料の状態としても紙の酸化劣化が激しく一部損失されている号も見受けられるが、戦前・戦中に刊行された資料ということ を考慮すると、歴史的に価値のある資料であるといえる。



『體驗教育』第1号1頁（1929（昭和4）年1月発行）

* 学芸員 明星教育センター

本稿では『体験教育』の概略を紹介するとともに、明星大学史にもつながる事項として、第25号（1931（昭和6）年11月15日刊行）の「校旗制定」に関する記事を取りあげ、明星大学の校章とスクールカラーであるえんじ色の制定の由来に関して、紹介する。

2. 『体験教育』の概略

『体験教育』は、明星学苑の前身である明星中学校が1929（昭和4）年1月15日から刊行され、第606号（2015（平成27）年12月17日現在）まで続いている明星学苑の校報誌である。第1号の発刊は、1928（昭和3）年11月10日の天皇陛下の即位の大礼に合わせ着手され、B5判9頁4段組み、8頁で制作され、翌昭和4年1月1日に生徒たちに配布した。

第152号（1914（昭和16）年8月号）までは順調に刊行していたが、153号からは、日中戦争の影響で、紙面を4頁まで縮小した。その後、太平洋戦争の影響で著しい用紙不足のため、一切の刊行物の一時停止を勧告され、1943（昭和18）年10月号（177号）をもって休刊した。^{*1}

終戦後のたび重なる学制改革に加え、学苑の拡張と充実のため、復刊が実現しなかったが、1956（昭和31）年5月20日の創立記念日を機に、復刊第1号（通巻178号）が刊行された。^{*2} 休刊に到った理由としては、『児玉九十自伝』^{*3}で以下のように述べられている。

昭和四年一月、明星中学校のバックボーンをなす「知行合一」「実践躬行」の精神を具現するために発行された校報『体験教育』が、戦争の激化で、やむなく昭和十八年十月号（一七七号）をもって休刊、その後十四年たった三十一年五月二十日の創立記念日を機に、一七八号から復刊されたことは、第二章の4にのべましたが、かえりみて、この十四年間の休刊期間とはなんであったのかと、感慨なきをえません。

表面的にみれば、戦争を遂行するためには用紙欠乏もやむをえず、したがって不急の出版刊行物を一時ストップして総力戦に集中するのは当然のことであり、休刊していったん敗戦となれば、戦後の学校自体の再建に血のにじむ努力を払わねばなりませんから、敗戦によってうけた打撃と、教育の根本的改革の嵐がいく分でも鎮まるまでは、とても復刊にこぎつけるところまではいけなかった、というのが実情ですが、一步踏みこんで、私はあの休刊前後のきびしい言論統制のことを思い起こすたびに、胸をしめつけられるような複雑な気持ちにおそわれるのです。（中略）

このように、1943（昭和18）年10月号（177号）をもって、休刊を余儀なくされた。表面的には戦争の激化により休刊とされているが、戦時下におけるきびしい言論統制が実情であった。休刊から14年、終戦後の11年にあたる1956（昭和31）年5月20日の明星学苑創立記念日には、タイトル文字、体裁、紙質を休刊時のままで復刊することとなった。以後、明星教育を伝える校報誌として現在も続いている。

3. 『体験教育』第二十五号の校旗制定と明星スクールカラーに関する記事

今回入手した『体験教育』資料群は、概要で述べた休刊以前の資料にあたるが、その中でも明星大学に受け継がれているものの一つとして、校章を示す校旗とスクールカラーを取りあげる。校章・校旗とスクールカラーというものは、学校において象徴であり、その多くは学校の由緒や校訓が込められていると考えられる。明星大学の校旗は、明星学苑と同様に、「星」をあしらった校章に、朱色のスクールカラーを使用した意匠であるが、今回入手した『体験教育』

第二十五号にはその由来に関して、以下、「校旗制定式」及び「校旗贈呈の辭」、「校旗制定式の祝辭」の3点の記事が掲載されている。

i. 校旗制定式

本校に於ては、校旗と校歌は一年から五年迄全學年が揃つてから作る方針になつて居た。それは此の兩方共、當校精神が生徒を通じて躍動して居る處を象徴したかつたからである。そして又、吾等の學校といふ念を強からしめるために、全學年揃つて制定式をあげたかつたのであつた。

第一回の大旅行たる満鮮旅行^{※4}も終り、愈々着手しようとして居る所へ、不圖、五年級から卒業記念に校旗を寄贈したいといふ議が起り、爾來四ヶ月を費して十二月二十日完成し、二十三日朝贈呈式があり、續いて同日十時半、大國魂神社神官司祭の下に最も嚴肅なる制定式が行はれた。

本校の新校旗は斯様にして生まれてもので極めて意味深いものである。

朱色の鹽瀬に金モールで校章を縫ひ出し、その左右には大小五個の銀星が配してある。一年から五年迄明星章を中心に一致團結して校風をあげるといふ事を示したものである。朱色は明星健兒の意氣と赤誠を表し、壯重にして而も明るく、且つ上品に出來てゐて、徹頭徹尾魂がこもつて、一見襟を正さざるを得ない。

これ全く至誠以て一貫してゐる経過そのものが示す當然の結果であるが、校風が如實に現はれ欣快の至りである。吾々は此の校旗の下に一層奮勵努力して校風の充實を計らねばならぬ。

(傍線部、筆者)

ii. 校旗贈呈の辭

第五學年總代 森 谷 歳 雄

私共は愈々明春三月第一回卒業生として、此の懐しき明星校を巣立つ事になりました。

此の名譽ある卒業に際し、一同いささかの記念品を残したいと思ひまして熟議したる結果、明星精神と共に永劫に残る校旗を寄贈する事に衆議一決致しました併し私共の考へのみにて、明星精神の權化たるべき校旗を造る事は甚だ越權無謀と考へ、一應校長先生迄其の旨申し上げました所、喜んでお受け下さるとの事で級一同欣喜致しました。

それから私共は校旗委員を選定し準備に着手致しました。此の間委員に於ては千歳の後迄傳ふる校旗といふ責任感と無經驗との爲めに、屢々大難關に遭遇致しましたが其の都度諸先生の懇篤なる御指導を得まして、今日廿日完成し本日贈呈式を擧ぐる事になりました。

今日贈呈の校旗は高島屋に命じて調整致させたものでありますが、朱色鹽瀬地に校章を縫ひ出してあります。

地を朱色にいたしたのは、燃ゆるが如き明星健兒の意氣と赤誠^(ママ)とを示したものであります。又校章の左右にある大小五つの銀星は、明星精神を中心に、各學年一致團結して校風を發揮する事に力むる意を表したものであります。

校旗完成の経過を述べまして贈呈の辭といたします。

(傍線部、筆者)

iii. 校旗贈呈の辭

生徒總代 橋 本 武 雄

本日茲に莊嚴なる校旗制定の式典を擧げられました事は、本校並びに吾々在學生と致しまして誠に慶賀に堪へない處であります。

校旗は明星精神の表徴であり且つ其の淵源でありまして、本校隆昌の永遠のしるべである事は申すまでもありません。

翻って思ふに、明星建學以來四星霜、その収穫は今や第一回の卒業生に依つて刈り取られんとして居ります。

吾々は吾校の過去を顧み、且つ將來に對する大抱負の實現を期すべき秋に際會してゐるのでありますが、幸に本日をして其の名譽ある第一回卒業生の熱誠なる母校愛のたまものとし、吾等が所依の表徴であり淵源である校旗を吾々の頭上に戴く事の出來ました事は、明星精神を彌々堅實なるしむものであり、且つ又吾校の校風を益々具體的に表徴する事を得たものであります。

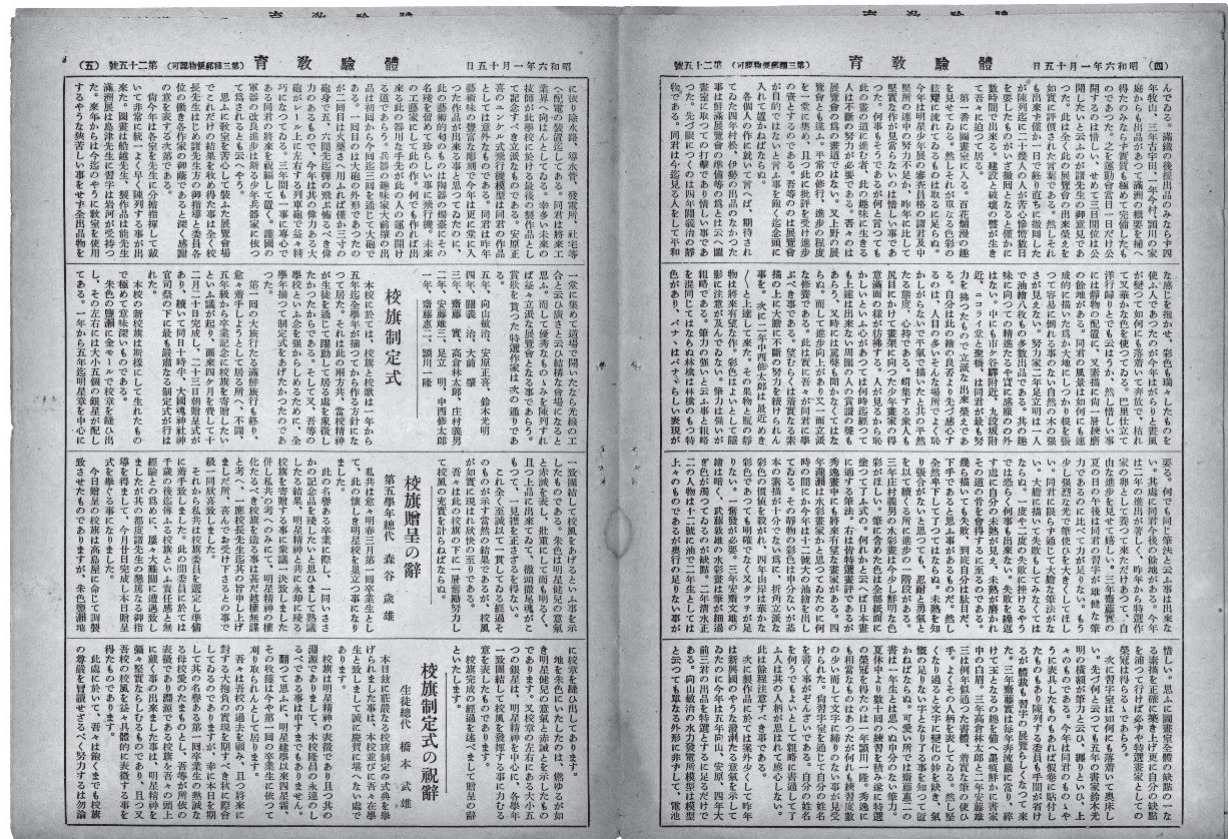
此處に於いて、吾々は飽くまでも校旗の尊嚴を冒讀せざるべく努力するは勿論校旗を寄贈せる第一回卒業生の赤誠を吾々の模範とし、校章を讓る五星となつて愛校の誠を致したいと考へます。

この記念すべき校旗制定の式典に際し所信を披瀝して祝辭といたします。

(傍線部、筆者)

これらの記事から、校章は、iに「その左右には大小五個の銀星が配してある。一年から五年迄明星章を中心に一致團結して校風をあげるといふ事を示した」、iiに「校章の左右にある大小五つの銀星は、明星精神を中心に、各學年一致團結して校風を發揮する事に力むる意」、iiiに「校章を讓る五星となつて愛校の誠を致したい」とあるように、創立当時の明星中学校の第1學年～5年を示す大小5個の星で、各學年が一致團結して校風を發揮するという意味が込められている。この星の数は、学苑の發展と共に数を増やし、現在は16個の星が配されている。

スクールカラーの朱色に関しては、iに「朱色は明星健兒の意氣と赤誠を表し、壯重にして而も明るく、且つ上品に出來てゐて、徹頭徹尾魂がこもつて、一見襟を正さざるを得ない」、iiに「地を朱色にいたしたのは、燃ゆるが如き明星健兒の意氣と赤誠とを示したものであります。」、iiiに「勿論校旗を寄贈せる第一回卒業生の赤誠を吾々の模範」



校旗制定に関する記事 (『體験教育』第25号,1931(昭和6)年1月発行)

とあるように、偽りなく、ひたすら真心をもって接する心を表す「赤誠」という語が由来であると考えられる。

このような校章とスクールカラーを用いた校旗は、1964（昭和39）年に設立した大学にも受け継がれ、その意匠を基に、大学開学の2年を経た1966（昭和41）年に、明星大学の校旗が制定された^{*5}。

4. まとめ

明星の教育の基軸である「体験教育」の理解を広めるため発行された『体験教育』は、戦争という非常事態により、休刊を余儀なくされながらも戦後に復刊し、現在も続いている。これは、『児玉九十自伝』の中で、

この『体験教育』は、ただの関係者のコミュニケーションをはかるものではなく、明星教育のあゆみを力づけるエネルギー源であるとともに、明星教育の理想と伝統を永遠に刻んでゆく一里塚であることをひしひしと感じたしだいです。

と記されている通り、現在でも脈々と受け継がれている「体験教育」の一つの象徴であると考えられる。

本稿では明星大学史にも受け継がれている事項として、『体験教育』第25号の「校旗制定」に関する記事を取りあげて紹介としたが、その他の号にも時代を経てもゆるがない「体験教育」の実践を紹介する記事が多数掲載されている。

今回の収集で得た資料群は、明星教育の基軸である「体験教育」の実践に対する基礎研究の資料として、大変価値があると思う。今後もこれらの資料群を活かし、明星大学の自校史研究を進めていきたい。

【註】

- *1 児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』（明星大学出版部、平成2年11月15日、216頁）
- *2 児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』（明星大学出版部、平成2年11月15日、216頁～217頁）
- *3 児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』（明星大学出版部、平成2年11月15日、340頁～341頁）
- *4 第一回の大旅行たる満鮮旅行…明星中学校で1930（昭和5）年の夏休みを利用して実施された朝鮮半島から中国東北部をめぐる旅行。児玉九十の「これからの教育は、海外に眼を開くものでなければならない」という信念から実施された。海外旅行が安易ではなかった当時として、生徒を連れての旅は画期的で、海外研修旅行の先駆けであったといえる。
- *5 明星大学50年史編纂委員会編「五十年の歴史」（『創立五十周年記念誌 第一分冊』、明星大学、平成26年10月26日、23頁）